

ともに歩み、ともに進む Gsway

Vol. 23
MARCH 2025

特集

DXで実現する自動化&省人化



DX

Digital Transformation



DXで実現する 自動化&省人化



FMDX開発事業部長 佐々木靖

人手不足の課題克服に向けて

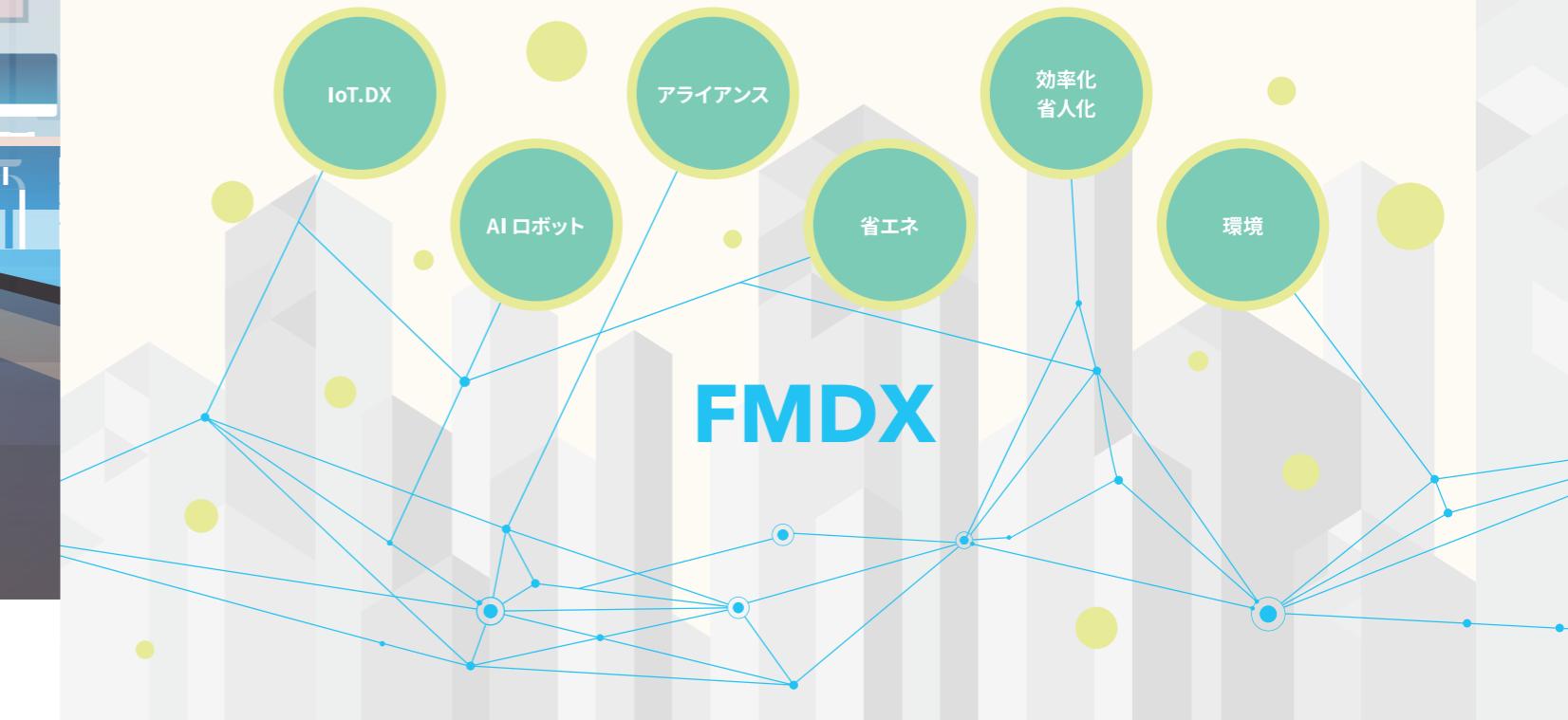
前号の特集でも取り上げましたが、いま日本の産業界は人手不足という極めて困難な課題に直面しています。当社が昨年秋に開催したお取引先セミナーで、リクルートワークス研究所の古屋星斗氏は、「現代の企業には、テクノロジーを活用した自動化・機械化を進め、ビジネスモデルの再構築に取り組むことが求められている」と述べられました。

そこで本特集では、グローブシップが推進するファシリティマネジメントDX化の基本方針と、それに基づく具体的な取り組みについてご紹介します。特に、省人化に大きく貢献する清掃ロボットの積極的な導入は、お客様からも高いご評価をいただいている。

Digital Transformation

FMDXで現場業務を変革

米国で生まれたファシリティマネジメント(FM)の概念は、1990年代以降に、バブル崩壊で経済停滞に陥った日本企業にも徐々に浸透してきました。ファシリティマネジメントとは、企業・団体が保有する建物や設備を、最適な状態で活用できるよう統合的に管理、運用することを指しますが、近年では、その実現にデジタル技術が必要とされることが多いっています。



デジタル技術の活用で 省人化と効率化を目指す

デジタルトランスフォーメーション(DX)というキーワードは、2010年代の半ば頃からIT業界を中心に注目され始めました。企業が競争優位性を維持・獲得するために、デジタル技術を駆使して製品・サービスに付加価値を与え、ビジネスモデルそのものを革新(トランスフォーム)していくこうという考え方です。

グローブシップの最大の役割は、ビルメンテナンス業務においてお客様に適切なファシリティマネジメントを提供していくことですが、現代の日本社会で最大の懸案の一つとなっている人手不足の問題は、当社にとって

も例外ではありません。

そこで当社では、ファシリティマネジメントをデジタル技術の活用で業務プロセスそのものを変革し、より効率的に行える環境を構築していくため、「FMDX」のビジョンを打ち出しました。この方針は、当社の社員がこれまで培ってきた優れた問題解決力に、AIやロボットテクノロジーによってたらされる革新性をプラスすることで、現場業務の大幅な省人化と、お客様が持つ資産の有効活用を目指そうとするものです。

FMDXの適用範囲は、「清掃」「設備管理」「警備保安」「ビル遠隔集中管理」など、当社が担う全ての業務に及びます。

清掃業務においては、何と言ってもAIロボットの活用が大きな期待を集めています。当社においても全国で数多くの清掃ロボットが活躍している他、次世代型の清掃ロボットの検証も積極的に行ってています。

設備管理業務では、センサーライブレット端末などを活用して、管理業務の工数削減と効率化を図るシステムが既に実用化されています。

また、警備保安業務を行う多機能型の警備ロボットの開発協力や、建物設備の状態を可視化してワンストップでの対応を可能とするビル遠隔集中管理システムの開発を進めるなど、デジタルテクノロジーの活用に多角的に取り組んでいます。

Digital Transformation

AIロボットが清掃を自動化、高品質化

当社が初めて清掃ロボットの実地検証を始めたのは2019のことでした。当時からすでに清掃作業従事者の確保が困難になり始めましたが、2020年のコロナ禍の拡大により状況はますます厳しくなりました。また、都心部でのオフィスビルの開設は2027年までに爆発的に増えることが予想されていたため、将来に向けた危機感が業界全体に広がっていました。そこで、ロボットの検証を行っていたチームを発展させる形で、2022年に「FMDX開発事業部」が発足しました。

現場からのフィードバックで機能改良

前述のように、当社では2019年に床面の清掃を自動で行うロボットの導入検証を始めました。評価基準としては、清掃能力(掃除機としての基本的な性能)の他にも、清掃作業担当者が実際に使用した際の利便性、さらには安全性などに重点を置いた検証を行っていました。

当時は、多くの業務用清掃ロボットを試用した他、家庭用の清掃ロボットなどもテストしてみましたが、業務用としてオフィスの広い面積を効率的に清掃する機能を十分に備えている製品は見当たらない状況でした。

そうした中、2019年5月に提供が開始されたのが、ソフトバンクロボティクス社の「Whiz(ウィズ)」です。

障害物や人の動きを検知して回避を行いながら自律走行できるWhizにより、現場の作業効率の向上が図れると考えた当社では、Whizを早々にテスト導入し、実際の現場における稼働検証を始めました。

ところが当初は、安全性を担保するために清掃作業担当者がロボットに付きつきりで清掃箇所を回らなければならぬ等、逆に人的負担が増えるという、省人化には程遠い状況が発生しました。さらに、清掃作業担当者の中には自分の仕事をロボットに取られてしまうのではないかという不信感や不安感を持つ方も少なくなかっ



清掃ロボットWhizシリーズ(左:Whiz、右:Whiz i アイリスエディション)

たようです。

そこで、稼働検証において表面化した想像を超える課題に一つ一つ対処するとともに、現場での検証データをメーカーにフィードバックする事で、判断した問題の解決を両社が共同で行う作業を進めてきました。

これにより、一度記憶させたルートを忠実に再現して、広範囲な床面の清掃を自動で行えるという、業務用清掃ロボットとしての機能改良が急速に進み、現場での実用に供する事が可能となりました。現在では、清掃業務のDX化における強力な武器として、オフィス、教育施設、商業施設など様々な施設で導入されています。

このように、当社では自律的に清掃を行うロボットに完全に任せができる体制を比較的早期に整えることができました。この裏には当社の現場スタッフがテスト導入の過程で多くの経験を積み重ねたことに加え、現場への導入支援を短期間で行えるスキルを身に付けたことが大きく寄与し

ていると考えています。

さらに2020年には、機能強化が行われた新型機「Whiz i(ウィズアイ)アイリスエディション」が登場し、清掃能力の向上、運用利便性の向上など、実用面での充実が図されました。

決められたルートに従って自動的に清掃を実行するため、高品質でムラのない床面清掃が可能となるだけでなく、清掃作業担当者による目視では見落とされがちな目立たない汚れや、隠れたダストなども吸引するため、清掃のクオリティをより向上させることができます。また、チリやホコリの舞い上がりが少なくなり、空間浮遊菌量を約5分の1にまで減少させることも報告されています。

人とロボットのハイブリッドな清掃を実現

グローブシップではこの数年間で、二次代理店への販売も含めて全国で累計300台を超える清掃ロボット

Whizシリーズの導入を行ってまいりました。これは日本国内でもトップクラスの台数となっており、当社内における清掃ロボットに関する知見は着実に積み重ねられています。

清掃ロボットを初めて導入されるお客様には、こうした当社の経験とノウハウを活かして、Whizシリーズの運用計画の策定サポートの他、ルート作成やテスト走行の実施、操作方法のご説明といった初期導入支援も行わせていただいている。

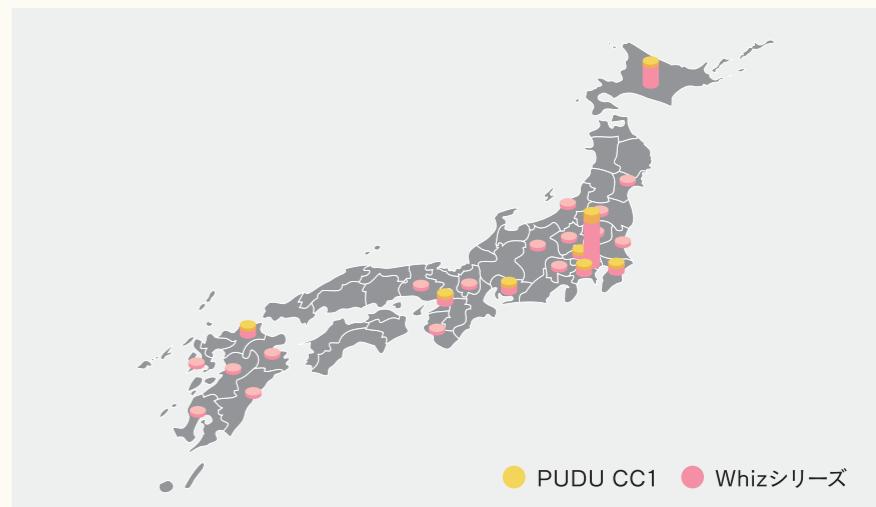
実は清掃作業にロボットを活用するメリットは、単に人手不足を補えるということだけではありません。清掃ロボットの稼働時間が増えることで、清掃作業担当者の時間に余裕が生まれるため、その分を清掃ロボットでは行えない作業に注力できるという重要な目的が達成できます。

実際の現場では、ロボットでは清掃出来ない水まわり清掃のほか、ロボットだけでは取りきれないような汚れを、清掃員の目視によって丁寧に除去する作業も欠かせません。つまり、清掃員が余裕をもって別の箇所の清掃に時間を割くことができるようになれば、結果的に清掃品質を大きく向上させることができます。

これが、私たちグローブシップが考



現場で機動的に活躍するPUDU CC1



清掃ロボットの全国での導入状況

れる、人とロボットのハイブリッドな清掃業務です。

現場の清掃のプロセスを細かく分解した上で、清掃ロボットに任せられる部分は最大限に任せられるよう、プログラミングにも似たフローチャートへと落とし込み、具体的な作業を組み合わせていくことで、人とロボットが協働しながら、より丁寧かつ高品質な清掃作業を実現することができるようになります。

水洗浄で汚れをしっかり拭き取る新機種も登場

2024年4月から取扱いを始めた

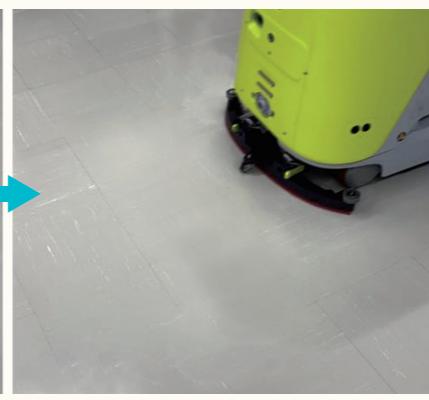
のが、水を使って床洗浄を行うことができる新型の清掃ロボット「PUDU CC1(プードゥーシーシーウン)」です。

このPUDU社はファミリーレストランチェーンで配膳を行っている猫型ロボットの会社です。こちらの方が皆さんにもお馴染みかもしれません。

清掃ロボットとしてのCC1は、一般的な除塵機能の他にも、アタッチメントを変えることで水を使った洗浄作業が行えます。また、AIによる障害物のスムーズな回避はもちろん、自動充電への対応、LiDARセンサーによる清掃ルートのマッピング機能により、自動で最適なルートを走行して清掃



CC1床洗浄前



CC1床洗浄後

を実行することができます。

さらに、大理石などの硬質な床からカーペットなどの柔らかい素材まで幅広く対応できるため、あらゆる環境で利用することができます。

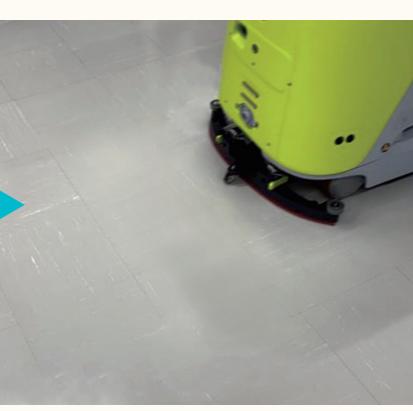
また、スマートのアプリを使うことで、作業状況をリアルタイムに確認できる他、清掃した時間や面積などの実績値を通知により把握できるなど、インテリジェントな機能も搭載されています。

当社でも既に30台以上の導入実績がありますが、水洗浄が可能になったことでPUDU CC1に対するニーズは今後益々高まっていくものと思われます。まだ製品を見たことがないお客様は、ぜひ機会を作ってご覧になられてください。そのスムーズな動作にきっと驚かれることでしょう。

この他に、各種ロボットのフロア移動に関する検証を計画中です。ロボットを最大限に活用するためには、人の手を借りずに移動できる範囲を広げていくことが求められます。そのため

に、エレベーターへの乗降対応の他にも、オフィスビルの扉を自律的に開閉できる仕組みの検証にも取り組みたいと考えています。自動で自由に移動できる範囲が増えれば、さらなる効率化が図れるはずです。

今後、さらに簡単に使えるようなロボットが登場する可能性もあります。コロナ禍を経験し、施設管理に対する人々の考え方も少しづつ変わってきました。今後も清掃ロボットの進化が

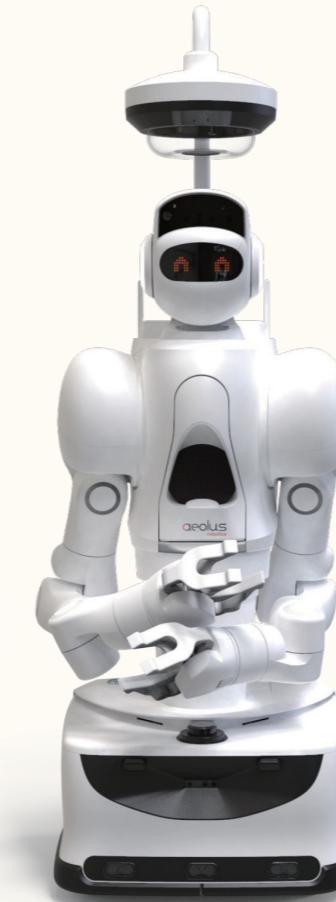


機能も搭載されている他、双方向の通話機能、環境変化を知らせるレポート、アラート発報など、様々な検知機能を搭載予定です。

また、最大の特徴となっているのが、左右に取り付けられた2本の腕です。これにより、自分でエレベーターのボタンを押して、フロアを移動することが可能です。これにより、ロボットがより広範囲なエリアを自律的に巡回できるようになるため、夜勤者の業務負担を軽減しながらも、警備の強化を図り、24時間の警備体制を確立することが可能となります。

さらに、視野360度の高性能カメラが搭載される他、駆動能力等のパワーアップと、各種センサー類の機能向上も予定されています。

当社では、最新型のアイオロスを2025年度の早い段階でお披露目すべく準備を進めております。是非ともご導入をご検討いただければと思います。



さらに実用化へと近付いた新型アイオロス

Digital Transformation

設備管理業務のDX化に向けて

グローブシップではAIロボットの他にも、設備管理を効率化するための様々なデジタルツールの導入と検証を進めています。デジタルを積極的に活用することは、人手不足の課題に対処するだけでなく、現場で長く用いられてきた業務手法そのものを全く新しい業務プロセスへと置き換えることで、革新的な効率性を手に入れることができます。

DX 検針、点検業務をスマホで簡素化

グローブシップが2年前から本格的に導入を進めてきたのが、電気、水道、ガスなどの設備機器のメーター検針業務を効率化するためのデジタルツール「管理ロイド」です。管理ロイドを使えば、スマホアプリを立ち上げてメーターの写真を撮るだけで、画像認識AIにより点検対象が正常に稼働しているかどうかが判断され、報告資料の作成を自動で行うことができます。

当社ではこれまで、全国の支店、営業所、グループ会社の約160か所の現場に導入してきました。従来2人以上で行っていた検針作業を1人に行えるようになるとともに、その後のExcelへの手動入力作業もなくなったため、人為的なミスは基本的に起らなくなりました。また、紙の出力量も激減し、ペーパレス化も進んでいます。さらに、作業直後にWEBダッシュボードで報告書を作成、確認できるようになり、報告プロセスのスピードと正確性は格段に向上しました。

今後は、管理ロイドが提供する多くの機能を、毎日行っている巡回点検などに積極的に活用するなど、さらなる省人化を図っていきたいと考えています。



管理ロイドによる点検作業

DX 遠隔監視とスマートビル化の実現

当社では、グループ会社を含む約250物件を対象に、遠隔監視による設備管理を行っています。これらは、集中監視センターで情報を得て、それを各設備の管理担当が共有して出動するといったプロセスになります。これに対して、当社が現在取り組み始めているのが、クラウドサービスを活用した新たな遠隔監視システムの構築です。どこにいても、すべてのメンバーが、すべての設備の管理状況を、リアルタイムで共有できるような仕組みづくりを目指して、ハードウェアとソフトウェアを開発中です。まだ実証実験が始まったばかりですが、将来的にはエリア管理の可能性が大きく広がるようなサービスを提供していくのではないかと考えています。



柔軟でリアルタイムなエリア管理をクラウド活用で実現

DX コミュニケーションツールの拡充

双方向のコミュニケーションを取ることができるウェアラブル機器の検証も進めています。現場の社員がスマートグラスを着用することで、手を使わずに遠隔地の指示者とチャットや音声を通じて会話ができる上、指示者からの指示書や図面を、作業者のスマートグラス上に投影するなど、リモートによる具体的な作業指示を行うことができる有効な機器になるものと考えています。

さらに、生成AIチャットボットの導入も計画しています。PCに関するトラブル対処や社内規定、社員の連絡先、パートナー企業様の連絡先など、社内での問い合わせに対し、サーバーに格納されている情報を使ってチャットボットが回答する仕組みの試験運用を、今年の1月から開始しました。テスト結果をもとに早期に本格運用に入る予定で、将来的には外部からの問い合わせ対応にも拡大して活用していきたいと考えています。



ハンズフリー型スマートグラス「リアルウェア ナビゲーター® 500」

お客様とともに歩む。vol.14



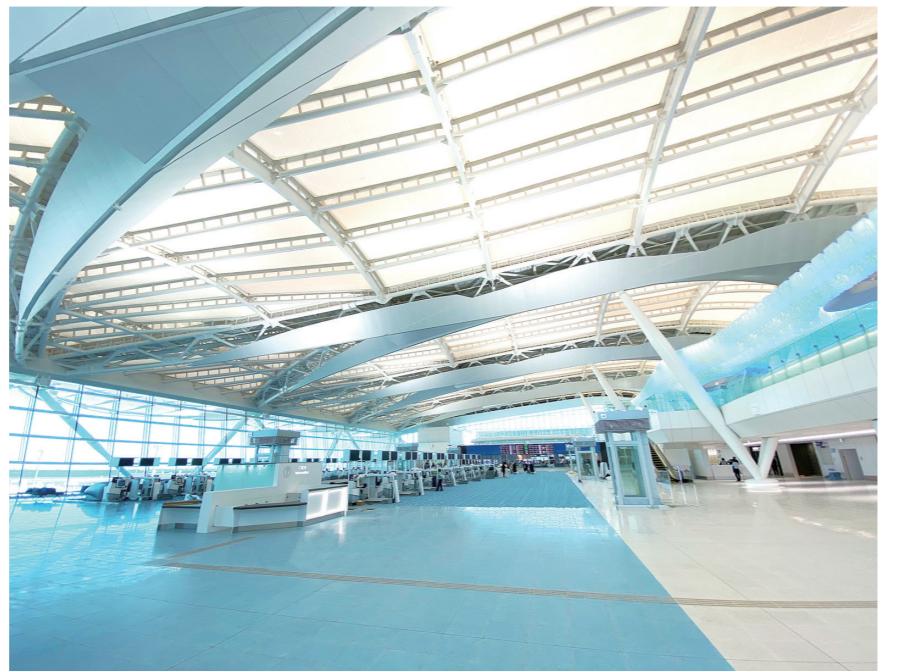
羽田空港 第2ターミナル



外光が心地良い国内線出発ロビー

Building Profile

所在地: 東京都大田区羽田空港3-4-2
施工: 2004年9月
延床面積: 約340,000m²



第2ターミナル国際線出発ロビー

世界に誇る日本の空の玄関口で 安全と快適さを守り続ける

1931年(昭和6年)に開場された東京飛行場は、その後さまざまな拡張工事を行いながら、1952年に日本政府に返還され、現在の「東京国際空港」、通称・羽田空港へと名称を変えました。1955年には民間資本によるターミナルが完成し、1964年に海外渡航が自由化されると、旅客数は急速に増えてきました。コロナ禍の静謐期を経て、今では従来の活況が戻った羽田空港ですが、その中でも国際線に対応する機能も兼ね備えた第2ターミナルは、飲食、物販などの店舗のほか、展望デッキやホテルも併設され、日々多くの利用客を迎えてくれています。

「世界一清潔な空港」 ランキングで9年連続第1位に

羽田空港の2024年の年間利用者数は8,000万人を大きく超え、国際線の総旅客数も、インバウンド需要の拡大を背景に過去最多になりました。また、空港施設そのものへの注目も高まっており、イギリスのスカイトラックス社が毎年行っている「ワールドエアポートアワード」では、「世界一清潔な空港」部門において羽田空港が9年連続で第1位を獲得している他、国内線空港の総合評価を行なう部門でも12年連続で第1位を保持しています。発着便の増大に伴い、2004年に国内専用ターミナルとして建設された「第2ターミナル」は、「海」をモチーフにデザインされた近代的なターミナルで、外光を取り入れた中央の吹き抜けが、明るく心地良い空間を作り出しています。また、2020年に新設された国際線エリアの出発ロビーには、全面ガラス張りで滑走路をパノラマで眺めることができる、開放的かつ感動的な空間が広がります。この国際線エリアはコロナ禍により約3年間の閉鎖を余儀なくされました。再開した現在は旅客数が順調に伸び、大幅な増便も行われています。

羽田空港における設備管理・環境衛生管理・植栽管理などのメンテナンス業務は、1999年に設立された日本空港テクノ株式会社が担っています。同社には、お客様第一の経営理念に基づいた「プラスワン」の精神が溢れています。社員はそれぞれ、自ら考え行動するための指針を記したプラスワンカードを常に携帯し、お客さまに付加価値を高めたサービスを届けることを目指しています。



滑走路を一望できる国際線出発ロビー



日本空港テクノ株式会社 業務本部 環境サービス部 環境管理課長 飯嶋一公様(左)
グローブシップ 東京国際空港国内線第2ターミナル出張所長 相澤英俊(右)

明確な基準のもと 清掃品質を維持

グローブシップでは、第2ターミナルの2階の北側と、3階～5階という広範囲なフロアの清掃業務を委託されています。毎日約2万ものお客さまが訪れる場所ですので、日々の清掃は極めて重要な任務です。

日本空港テクノからグローブシップへの業務委託は、性能発注方式で行われています。これは、求める品質や性能の要求水準を規定した上で、業務委託者にその実現方法を委ねるという発注方式です。日本空港テクノ株式会社 業務本部 環境サービス部 環境管理課長の飯嶋一公様は、広大な施設の清掃品質を高めるためのポイントについて次のように話します。

「当社では、床面の光沢度や不具合への対応スピード等に定量的な基準を設け、さらにインスペクター(検査員)が定期的なモニタリングを実施することにより、最高レベルの美観を維持することに努めています。さらに、清掃員の自由度と裁量のもと、各人の持つ能力を最大限に発揮して要求水準を満たす作業を行ってもらうことが、美観向上のカギになるとと考え、性能発注方式を採用しています」

清掃ロボットを 積極的に活用

グローブシップのスタッフは、主にロビー、トイレ、喫煙所、店舗などの清掃作業、およびゴミ回収を行っており、さらに現場には清掃ロボット「Whiz」や、床面洗浄ロボット「AMANO EGrobo」など合計4台のロボットが導入されています。ロボットの導入当初は、ロビー内の障害物や段差によるエラーなど、走行ルートの完成までには様々な苦労がありました。現在では、ロボットと清掃員が分業して効率的に作業を行うことで、労働力を重点作業に集中できるようになり、清掃時間の大�な短縮だけでなく、清掃品質の向上にもつながっています。

グローブシップの業務対応について、飯嶋様からは次のような大変高いご評価を頂

いています。
「グローブシップさんは、当社が希望する新たな取り組みにも積極的かつ迅速に対応するなど、常に前向きにチャレンジする姿勢で行動してくれます。そして、現場責任者の方の業務に対する意識の高さが、スタッフ全体の力量の底上げにつながり、それが清掃品質のクオリティにも現れていると感じます。これからも、羽田空港が世界一清潔な空港としての美観を維持できるようお力添えいただきたいと思います」
また、日本空港テクノの今後の取り組みについて、飯嶋様は次のように話します。
「これからも絶対安全を第一とした経営理念のもと、事故やトラブルに対する予防処置を講じるとともに、人財育成を強化していくことで、サービス品質の更なる向上を図っていきたいと考えています」

グローブシップ 東京国際空港第2ターミナル出張所 所長 相澤英俊

日々の清掃業務は、朝番、中番、夜番に分けて行っていますが、お客さまが途切れることのない場所であるため、ロボットによる床清掃は空港が閉場した後の深夜に行います。石床面については、ダイヤモンドパッド研磨によって光沢度を維持することが重要な作業となります。

年末年始やお盆などの多客期は、大勢の方が行き交うロビー内での接触が無いよう、細心の注意を払いながら作業に当たります。またロビーではお客さまからいろいろと尋ねられる事も多いので、間違った案内をしないよう館内の施設を把握することはもちろん、笑顔での対応を心掛けています。

今後も、ロボットの力を借りながら、余裕が生まれたスタッフの時間を、人にしかできない重要な業務に充てることで、清掃品質の向上に努めてまいります。

配置人数: 総括管理責任者 1名、時間帯責任者 6名(日勤4名・夜勤2名)、クリーンクルー 38名(日勤23名・夜勤15名)

管理対象: 羽田空港第2ターミナル 2階北チェックインロビー、テラスレストラン、マーケットプレイス、国際線(T2i)エリア



WELCOME!

グローブ会社へようこそ！

全国に広がるグローブシップグループのネットワークをご紹介いたします。



グローブシップクリーンサービス株式会社

日常清掃から高所での清掃作業まで 高品質なサービスを総合的に提供

当社は、1978年に日本ビルクリーニング株式会社として中央区日本橋で創業して以来、47年間にわたってビル清掃サービスを提供してきた企業です。その間、事業拡大に向けた増資を行うとともに、エヌ・ビー・エス・クリーンシステム、並びにビル代行サービスとの合併を経て、売上を着実に伸ばしてまいりました。そして2017年10月にグローブシップクリーンサービス株式会社へと社名変更し、現在に至っています。

当社の特徴としては、日常の清掃業務の他にも、グローブシップのグループ企業の中では唯一、ビルの窓ガラスや外壁など、高所における特殊清掃を自社内で行っていることが挙げられます。高所での清掃を行う作業員には、労働安全衛生規則で、ロープ高所作業特別教育やゴンドラ特別教育などの研修を修了することが義務付けられています。当社には、ビルクリーニングに関する資格のほか、こうした高所での特殊業務に特化した教育修了者が在籍しています。

そうしたノウハウは、実際の高所作業の他にも、ビルを新たに設計する際に安全確保の提案をさせていただくという業務にも

会社情報 グローブシップクリーンサービス株式会社

所在地：東京都港区芝4-11-3 芝フロントビル 3F

設立：1978年8月(2017年10月に日本ビルクリーニングから社名変更)

事業内容：建物内外の日常清掃・定期清掃及び建物内外壁面の清掃・点検・補修、事務所等の改修・内装工事(カーペットの施工・補修)、ガラス清掃 他

主な管理ビル：オフィスビル、データセンター、商業施設、劇場、ホテル等

従業員数：530名(2025年1月現在)

活かされています。

一方で、当社においても人手不足の問題は深刻です。社員募集を行なっても十分な人材を確保することが難しい状況が続いており、定年を迎える社員の中で健康な方には、継続的に働いてもらっているのが現状です。

研修だけでなく、お客様の施設で作業を行う上での挨拶やルールなどのマナー研修も充実させています。また、ミャンマー出身の巡回指導員を現場に配置して、外国人スタッフの相談に乗ったり、清掃指導を行ったりする活動も始まりました。

さらに、社会貢献という面では、洗剤を使用しない新たな清掃技術の普及をより多くの現場で進めていくなど、環境対策にも積極的に取り組んでいます。



グローブシップクリーンサービス株式会社
代表取締役社長 伊藤克己

当社では、グローブシップをはじめとする様々な企業に清掃員を派遣するため、来期を目指す派遣登録の準備を進めています。当社の役割は、品質と安全をモットーに、当社が持つ特殊技能を最大限に活かして、お客様のご要望とご期待に応えていくことにあります。そしてその先に、必ずや企業としての成長が待っている信じています。

清掃サービスエコマーク認定が84施設に拡大

当社は、公益財団法人日本環境協会が実施する「清掃サービスエコマーク」の取得を積極的に進めておりましたが、今年に入り17施設の認定を取得しました。これにより当社の認定施設は2月時点で84施設となりました。「清掃サービスエコマーク」は、清掃業務を行う事業者が環境配慮に適正に取り組んでいることが評価されるものであり、環境への負荷が少なく、環境保全に役立つと認められたサービスだけが使用できる環境ラベルです。

当社は「地球にやさしく、お客様の安全・快適な環境づくりに寄与し、社員の幸せと社会の発展に貢献する」というミッションの下、環境に配慮した清掃サービスを提供し、今後もお客様のSDGs目標の達成に貢献してまいります。

品質向上安全衛生大会を開催

昨年10月3日に、本社会議室において「2024年度グローブシップ品質向上安全衛生大会」を開催し、社長以下役員、部長・支店長、営業本部の課長以上、本社安全衛生委員およびグループ会社の代表など、リモートを含め97名が参加しました。冒頭に社長の矢口が「ケガをしない、安全に注力するというのは当然のことながら、今後も安全な作業を続けていくために、今日ここで発表される具体的な事例について、全員がしっかりと共有いただきたいと思う」と挨拶しました。

続いて、労働災害発生状況に関する報告、今年度発生した労災事例とその対策について説明した後に、2024年3月に認定を受けたエコチューニング(温室効果ガス削減を目指した取組み)の説明を行いました。また、毎年社内で公募している「労働安全衛生標語」の優秀作を発表して表彰状の授与を行い、受賞者の代表が「労働安全宣言」を読み上げ、労働災害防止及び安全衛生活動を自主的かつ積極的に取り組むと誓いました。

最後に、取締役の東条が「本日は労働災害の発生状況報告と併せて、エコチューニングについて紹介したが、私たちの取り組みがお客様の脱炭素への取り組みにも大きく寄与するものと考え、少しでも新たなヒントになればと考える」と話し、全員で「ご安全に」と発声して締め括りました。

古屋星斗氏が当社を来訪

第8回グローブシップ株式会社お取引先セミナーにご登壇いただいた株式会社リクルート リクルートワークス主任研究員の古屋星斗氏、および同研究員の岩出朋子氏が当社を来訪され、人手不足への取組み、特にデジタルやロボット導入に関してインタビューをされました。説明にあたった当社FMDX開発事業部常務執行役員の諸橋勝悟、および理事の佐々木靖からの内容は「エッセンシャルワークの現場における事例」として、追ってリクルートワークス研究所のWebサイトに掲載いただける予定です。



協力パートナー会賀詞交歓会を開催



第7回本社GS協力パートナー会賀詞交歓会を1月30日に開催いたしました。会員企業42社から74名、当社からは役員の他、現場の管理運営を担当する部門長、課長など64名の総勢138名が参加し、交流を深めました。社長の矢口が「社会情勢の変化による原価上昇や、厳しい労働市場など多くの難問がある状況でも、会員企業様と一緒に取組み、お客様により良いサービスを提供するために努力していく」と挨拶しました。

春風亭昇吉の 耳寄ばなしと太ばなし

九

落語と吉原

今年のNHK大河ドラマ『べらぼう～葛重栄華乃夢嘶～』は、江戸時代中期の出版業者・葛屋重三郎の生涯を描く歴史ドラマです。初回では、当時の吉原の風景が鮮烈に描かれました。

江戸時代初期に幕府公認の遊郭ができる「元吉原」は、現在の日本橋人形町にありました。この地域は1657年(明暦3年)に「振袖火事」と呼ばれた明暦の大火で大きな被害を受け、それを機に現在の台東区日本堤に移転したのが「新吉原」です。「新吉原」へ移転後も、吉原は何度も火災に見舞われ、その回数は1866年(慶応2年)までの191年間で22回にも及びました。『吉原炎上』(1987年公開、東映、主演：名取裕子、監督：五社英雄)という映画もありますね。

吉原の遊郭が正式に廃止されたのは1958年(昭和33年)3月31日です。現在ではその痕跡を辿るしかありません。江戸時代、吉原は文化と娯楽の中心地としての役割を果たしました。落語はその特殊な舞台を活かして多くの笑いを生み出しました。今回は、吉原を題材とした代表的な落語、いわゆる廓嘶(くるわばなし)についてご紹介します。

◆ 吉原を舞台とした落語の演目

「明鳥(あけがらす)」は、遊興を知らない堅物の若旦那が、大旦那の指示で初めて吉原に連れ出される物語です。八代目桂文樂が得意とした演目で、吉原の豪華な非日常空間と初体験に戸惑う若旦那の姿がユーモラスに描かれています。

「紺屋高尾(こうやたかお)」では、藍染めの職人・久蔵が吉原の人気花魁・高尾太夫に恋をし、3年かけて大金を貯め、ついに彼女と結ばれます。久蔵の真摯な思いと高尾太夫の愛情が描かれます。

「お見立て」は、花魁の見立てや遊郭の習慣を背景に、田舎者の客と店の者とのやり取りをユーモラスに描いた作品です。

また、「文七元結」は、博打の借金返済のために娘を吉原に身売りさせた父親が、その金を若者に譲る人情嘶です。親子の情愛と江戸っ子気質の物語は、日本人の心をつかみました。

◆ 落語はおとぎ話

吉原を舞台とした落語を聞くことで、当時の人々がどのように夢を見、笑い、そして生きていたのかを感じることができます。しかし、廓嘶は、落語というおとぎ話だからこそ、笑いや涙を生むのでしょうか。「文七元結」の長兵衛は、娘を売ったお金を見ず知らずの者に譲りますが、娘の立場からすれば大鑿麿です。現代のSNSで拡散されたら大問題になり、それこそ、別の意味で吉原「炎上」するかもしれません。



煙管を吸いながら営業メールを書く遊女

春風亭昇吉／落語家

1979年岡山県生まれ。史上初の東大出身落語家。在学中に全日本学生落語選手権・策伝大賞で優勝し、東京大学総長大賞を受賞。2007年に春風亭昇太師匠に弟子入り。厳しい修行時代を経て、2021年に真打昇進。気象予報士やテレビ番組の司会等、広範に活動を展開しています。